

令和5年度 学校総合評価

6 今年度の重点目標に対する総合評価

5月に新型コロナウイルス感染症が5類に移行したことにより、すべての行事や事業をコロナ前の状態に戻した。東北育才学校との交流は実施できなかったが、アメリカ研修は4年ぶりに行うことができ、体育大会やコーラスコンクール、新入生合宿などの学校行事も特に制限することなく実施することができた。

昨年度から三つの方針（スクール・ポリシー）を掲げ、指導を行っている。主体的に学習を進め、自らの進路を切り拓いていく力を育てるとともに、学校行事や部活動を通して、豊かな人間性を育むことが本校の目標である。

平成26年に指定されたスーパーサイエンスハイスクールについては、今年度Ⅱ期5年の最終年であり、昨年末、文部科学省にⅢ期目の申請を行った。Ⅱ期の中間評価では多くの点で大変よい評価をいただいた。「課題研究の質を高めるような手立てを普通の授業改善と結びつけて実践することが期待される」と要望を受け、今年度は理数教育のさらなる充実を目指し、理数科学科の生徒だけではなく、人文社会科学科、普通科を含む生徒全員に対して生徒の主体性が発揮されるような工夫された教育を目指し、教科横断的な教材開発、探究科学科1年で行っている『探究モジュール』を普通教科でも行えるように改良することに着手した。SSH中間評価および昨年度からの課題等を踏まえ、具体的重点目標として5分野10項目の目標を掲げた。

今年度は前年度から40%ほど重点目標を変更した。定点観測の意味もあったが、新たな視点で目標を設定し、取り組むこととした。概ねどの分野においても目標を達成できた。特に、「読書指導」は様々な機会を利用し、図書館の利活用を促進し、本の貸し出し数は前年度の1.4倍になるなど成果が見られた。また、昨年度向上した割合が低かった「体力の向上」についてもトレーニングの効果が出てきており、目標が達成できた。コロナの制限がなくなったことも要因の一つである。

スーパーサイエンスハイスクール指定後、難関大学の志願者が年を追って増えてきており（今年度は横ばい）、合格者数も増加している。特に、探究力の基礎となる力を育む『探究モジュール』（「7つの力」をつけるためのユニット学習）開発後、伸びてきており、このユニット学習の効果が感じられる。『探究モジュール』については今年度も他県のSSH指定校へ紹介したり、説明会を開き、県内の高校への波及に取り組んだりした。

7 次年度へ向けての課題と方策

本校は32単位で授業を編成している。新課程では情報が共通テストに導入されることもあり、特に探究科学科における情報の指導が懸念されている。探究科学科での探究活動については、一部を普通教科に移行しながら行っており、今年度は探究科学科1年生で基幹探究を3単位から1単位減じた。2単位でも効果が得られる『探究モジュール』の新しい教材の開発と指導法の研究が急務である。普通科においては今年度多くの企業や機関と連携し、探究活動を進めた。来年度についてもこれを継続し、普通科、探究科学科（理数科学科、人文社会科学科）が互いに刺激し合い、高め合うような融合システムを構築することが課題である。生徒全員に対して生徒の主体性が発揮されるような工夫された教育を目指し、教科横断的な教材開発を行っていききたい。

生徒の学力向上を目指すことはもちろん、学校行事や部活動の充実を継続して図り、健全な心身・優れた知性・豊かな情操を培い、民主的で自主性・創造性に満ちた人間の育成に努め、生徒・保護者・地域・社会の期待に応えるとともに、「新しい社会を共創し、未来の世界と日本をリードしていく生徒を育成する」ために、「計画・実行・検証」の学校評価システムを確立し、充実した教育活動を展開していききたい。